



告

ラウンドテーブル報告 応用構築主義と批判的構築主義

——構築主義の有用性？——



中河 伸俊

1 ラウンドテーブルの課題設定

構築（構成）主義ということばは近年、前提を異にする多様な研究を指して使われるようになっており、そうした諸研究の間にいわゆる家族的類似を認めることも、必ずしも容易ではなくなっている。とはいえ、社会学において主流であり続けてきたポジティブイズムの方法論に批判的であり、それに伴う実在論や本質主義と呼ばれるような前提を原則として取らない、という点は一応、共通しているといえるだろう。それは、いいかえれば、社会学的探求の対象を固定化された「もの」として捉えない、ということの意味する。そして、そうした姿勢を選び取るとき、従来社会学者が引き受け（ようとして）きた、応用と批判という2種類の実践的作業を、以前と同じやり方で行うのは難しくなる。この困難への一つの対応として、応用や批判といった実践的関心から一線を画する形で、構築主義的探求を位置づけることが試みられてきた。たとえば、社会問題の構築主義的研究は、「状態ではなく活動を研究する」という公準に沿って、「問題な状態を解決する」ための方策を

めぐる議論や提言への参与から慎重に距離をとる姿勢を保ってきた（Spector and Kitsuse 1977; 中河 1999）。

しかし、近年そうした構えに変化の兆しが見える。構築主義を掲げる社会問題の研究者が社会問題の「解決」の構築について語るようになり、また、精神医療の短期療法をヒントに問題解決について論じる試み（ミラー 2003）も登場している。また、エスノメソドロジーにおいても、主流の社会学と違った前提からの、さまざまな応用レベルの営みがあることが知られる（山崎 2004: 4章, 14章など）。いっぽう、いわゆる現代思想の影響を受けたジェンダー／セクシュアリティ研究やマイノリティ研究、福祉・医療などの分野での構築主義的研究や脱構築論にはもともと、構築のイメージの批判的な性格を強調する構えが顕著だった。

こうした現状から、次のような問いが導かれる。広い意味での構築主義的探究（エスノメソドロジーやシステム理論系統のラディカル構成主義なども含む）にとって、応用的であるということ、および批判的であるということは何を意味するのか。そのような研究の

学問的文脈の外での有用性について、どのように考えればよいのか。本ラウンドテーブルでは、この問いについてのオープンな議論の口火を切ることを目指して、児童虐待問題の構築主義的研究を批判的なスタンスで進め（上野・野村 2003 など）社会福祉という領域に関する識見も豊富な上野加代子氏、システム理論的な臨床社会学を構想し（矢原 1999, 2003）それに即した調査研究を試行中の矢原隆行氏、エスノメソドロジストとして制度的場面（皆川 1993）や性現象（皆川 2002）の研究を提出している皆川満寿美氏、医療思想史や医療人類学の立場から近代医学をめぐる諸言説の批判的解釈（たとえば佐藤ほか 2000）に携わってきた佐藤純一氏の4人に基調報告をお願いした。

2 報告と討論

第1の上野報告「いわゆる『社会構築主義の批判力』について」ではまず、合衆国と日本での児童虐待問題の構築過程とそれに伴うポリティクスを記述・分析した氏の2冊の本への反応が回顧された。氏は、それを純粋な社会学の専門書としてではなく、福祉の仕事や教育に携わる人たちを含む一般読者をも念頭に置いて執筆したが、それに対して肯定的、否定的の両様の反応があった。「目から鱗」「問題への対応をバランスのとれたものするために必要な議論」といった好意的な評も寄せられたが、他方に、「何をいいたいのかわからない」「関係者の努力に水を差す」「現場で仕事をしたくない人のバイブルになっている」といった酷評も受けた。ただし、「目から鱗」的驚きはすぐ忘れられる一過性のものであり、「現場」で行われていることの組み直しにはつながらなかった。

構築主義的研究に対して「現場の人たちの心（あるいは神経）を逆なでする」というコ

メントが臨床社会学者から寄せられているが（大村ほか 2001: 28-9; 野口 2001: 73-4）、氏も同様の批判を受けた。そうした批判では、（社会問題の構築主義 = （作法をわきまえない）傍観者で、現場のひとの気持ちに鈍感）と（臨床社会学（ナラティブセラピー） = 現場（当事者）と協働し現場（当事者）のひとの気持ちにセンシティブ）という対比が使われる。しかし、「現場」や「当事者」とは誰なのか、それはどのようにして構築されるのかが問われる必要がある。さらにいえば、「逆なで」しなければそれで良いのだろうか。上野氏の本にいちばん厳しい批判を寄せたのが社会学者（社会病理学者、家族社会学者、臨床社会学者など）であったことからして、「逆なで」批判は、「現場」を意識した社会学者の一種の自主規制ではないかという疑問もわく。そもそも、まったく「逆なで」をしないような社会学的分析がはたしてありうるのか。あるとして、それが社会学的な評価に値するのか。

上野氏は、構築主義的な研究の「有用性」を考えるにあたって、現業部門の実践家やクライアントに判断を委ねることには疑問があるとみる。そもそも、社会学にとってのクライアントは誰なのか。社会学者は、誰から依頼されて問題を探しそれに「治療」を施そうとするのか。氏は、社会構築主義的研究を、ハッキング（Hacking 1999）に倣って「自明で必然」であるように見えるものを揺るがそうとする「啓発を含む現状への批判」として位置づける。こうした批判的作業の成果は、社会学の中だけで完結するものではない。氏は、ソーシャルワーカーなどの経験を持ち、いわゆる「現場」の仕事の言語も社会構築主義の言語も使える「バイリンガル」な研究者（N. パートン、L. ペルトン、L. マーゴリンなど）の仕事の中に、かれらにとっての「構築主義の有用性」を認める。これが、本ラウンドテーブルの課題への氏の暫定的な答えである。

第2の矢原報告「応用の批判と批判の応用」では、ルーマンのシステム理論（ラディカル構成主義）の立場からすれば、「社会構築主義による研究プログラムもまた、学システムの一部である社会学という観察システムの一部である以上、それらの有用性は、そうした社会的コミュニケーションがさらなる社会的コミュニケーションの産出に寄与し得るか否か」にかかっている、という「素っ気ない結論」がまず確認された。いいかえれば、機能分化した社会システムにあっては、「何かのための社会学」でも「社会学のための何か」でもなく「社会学のための社会学」という方針が理に適しているというのである。とはいえ、それが報告の結論ではない。社会的観察はもとより社会システムの外部にあるわけではないから、それは他のさまざまなコミュニケーションに対して多様な水準で介入的でありえるし（これは矢印を逆にしてもいえる）、また、社会構築主義についてのそうした検討は、社会的観察をめぐる社会的観察として有用でありうると、氏は指摘する。

氏は、社会構築主義とラディカル構成主義の異同について後者の観点から「観察」したあと（これは前者で論争の種となったいわゆるOG=存在論上の境界の恣意的設定問題が、後者からはどのように見えるか、という論点を含む）、社会学の方法論上のアジェンダを、[what（対象の観察）/how（観察の観察）]と[応用（対象の変容）/批判（観察枠組の変容）]をかけ合わせた四分法によって整理し、応用的社会学・応用構築主義・ポジティヴィスティックな批判・批判的構築主義と仮に名づけられた研究実践のタイプを同定する。こうした整理からいえるのは、ある水準において批判的[応用的]であるということは、他の水準において応用的[批判的]であることを含意し、あるいは、ある水準において批判的[応用的]であることが別の水準において批判的[応用的]に用いられる、といった

場合に、応用/批判、およびhow/whatの相互的な織り込み関係が見出されるということである。中河（2005）の「howとwhatの往還」という構築主義的研究のやり方についての提言も、水平的な往還ではなく「how（観察の観察）を通してwhat（観察を行う対象）の立ち現れを観察するという相互に織り込まれた試み」として理解すべきだと、氏は論じた。

最後に、こうした織り込みに自覚的な研究実践として、ナラティヴ・セラピーの一潮流であるリフレクティング・プロセスをチャイルドライン（子ども専用電話）のボランティア活動に適用した氏自身の研究（矢原 2004）が紹介された。この研究を振り返って氏は、社会的観察とチャイルドラインの視座によるそれぞれの対象の観察、観察の観察、観察の観察による批判や観察の観察による応用等々の「多層的に織り込まれた（かのようにここで記述される）批判的/応用的な社会学的研究実践のその位置価値は、あくまである時点、ある場所、ある視座の局所において見渡し得る一定の範囲において偶発的に理解されるだろう」と述べた。この「偶発的」はanything goesではないが、しかし、有用性はそうしたコミュニケーションの局所性において立ち現れるものなのである。

第3の皆川報告「エスノメソドロジー研究と『批判/応用』」では、エスノメソドロジー（EM）の研究関心とは、「accountability（出来事/場面/活動の観察可能性-報告可能性としての合理性）」という社会秩序の解明、いいかえれば、「その場を越えた一般性」を持ちながらその都度ごとに異なる「その場に固有の詳細」を観察可能なかたちで備えている社会秩序が人びとによって「どのようにして」成し遂げられているかを記述することだという点が、まず再確認された。つまり、EMは他の社会学とは、問いも研究対象も異なる。この点を把握すれば、EM研究が「批判」や

「応用」といわれる行為と直接的には結びつかないことが容易に理解できるというのが、氏の議論の基本線である。

応用EMといわれるものの例として、氏は、最近邦訳されたメイナードの『医療現場の会話分析』(Maynard 2003)を祖上にあげ、そこで会話分析の成果の応用として「悪い知らせ」を伝えなければならない医師に推奨されるやりとりの技法(たとえば「質問しながら質問によって答える」といった)が、はたして医療現場で「役に立つ話し方」を同定したものと見えるのかと疑念を呈す。医師と患者やその家族とのやりとりは、その毎회가「その場に固有の詳細」を形作るさまざまなリソースに支えられており、あるやりとりの場面と「同じ環境が、これから発生する別の環境で整えられると考えることは現実味がない」。だから、メイナード自身も、彼の推奨する技法上の心覚えに「もし有効であるなら」という(一種同義反復的な)前置きをつけている。しかし、本当にその心覚えが適切かどうか、有効かどうかは、実際に使ってみなければわからない。

いっぽうに、EMに「批判的」を冠する試み(たとえば好井1999;山田2000)があることが知られる。しかし、皆川氏は、批判という語は研究対象にした現象自体への「評価」をするという活動の実行を意味するが、EMの研究関心のあり方からして、EM研究の中でそうした活動が行われないことは明らかだと述べた。さらに、社会問題の構築主義におけるこの間の応用や批判をめぐる議論について、氏は、それらは結局「客観主義を払拭していない」というEMサイドからの批判(西阪1996)をクリアーしていないのではないかと問いかけた。最後に、氏は、ラウンドテーブルの準備段階での、「EM的知見は、研究対象とされる人びとの活動に即したものであるがゆえに、少なくともポジティヴィストの知見に比べて、そうした人びとの活動へのフィー

ドバックという意味での「応用」が比較的容易なのではないか」というオーガナイザー(筆者)の問いに対して、(a)そうかもしれないがそれは定義上EM研究そのものではないし、(b)「役に立つ」かどうかは「現場の人びと」がどう考えるかにかかっている、そして、(c)「絶対確実(すべての場面に有効)な方法などない」というEMの知見は「現場の人びと」への適切な助言や批判になる可能性があるが、このような言明は通常、聞いてお礼をしなくなるようなものではないと答えた。

第4の佐藤報告「神聖なる空間「現場」[臨床]の構築——構築主義的議論の応用・有効・有用をめぐる」は、構築主義の有用性という本ラウンドテーブルのテーマ設定自体が、「何のための(誰のための)社会学(または学問)か」という設問から導き出された「社会学(者)のための社会学」批判(その系としての「傍観者」的構築主義へのバッシング)を受容した結果ではないかという問いかけから始まった。社会学者には「現場」「当事者」「実践」「現業部門」へのコンプレックス・憧れおよび「聖化」の傾向があるようだと、氏は観察する。しかし、かれらは同時に社会学が他者(社会学以外)の問題構成に取り入れられてその固有性を失うことを危惧し、社会学的世界の中に「現場」を構築する。それによって、そうしたヴァーチャルな「現場」に関わる学問的営為は「実践」と呼ばれ、「現場の人びと」に役に立つものと規定され、さらにはそうしたタイプの研究をしない社会学者に貼りつける「傍観者」のラベルが創出される。

氏は、応用の語義を、(1)(基礎)理論の「現実」「現象」への適用の試み、(2)理論を適用することによって「現実的諸問題」を「解決」しようとする試み、(3)ある理論(知識)を他領域で使うこと(援用に近い)の三つに区分し、(3)に至ってはじめて応用(援用)する側、つまり理論のユーザーやクライアント

による応用可能性・有効性の判断が登場するとする。しかしそもそも、有効性とは何か。それはsense dataとして示されるものでも自明なものでもなく、理論と文脈と関係性によって構築されるから、誰が、どのような介入（インプット）とどのような結果（アウトプット）をどのような文脈の中で捉え、どのような評価基準に照らして判定するのが問われなければならない。「行う（適用する・実践する）」ことと「その行為（実践）が有効である」ということは別の問題であり、後者は（たとえば医療においては19世紀半ば以降に登場した）近代的な概念である。そして、有効性を語ることは、正当性を主張する手続きであるように思われる。「我々の社会学（理論）は、あの人たち（クライアント）にとって役に立っている」という有用性についての言明は、社会学者による他者としてのクライアント（介入対象・問題）の措定とかれらにとって「役に立つ」ことの推定を伴うが、ここで介入（者）にとって役に立つことと被介入者にとって役に立つことの混同が行われる可能性がある。さらに、こうした言明はしばしば、他の領域でのモデルのアナロジーによる有効性の密輸入（領域Aでの「有効性」を領域Bでの「有効性」に置き換えること）を伴う。

氏は、社会構築主義は上記のような有効性とは無縁な理論であり、それがその理論のユーザーとしての氏にとって役に立つのは、まさしくそれが「逆なで」するからだという。病は構築物だというテーゼは、医学・医療関係者を「逆なで」しかれらの想定を揺るがすからこそ、他の可能性を考えさせるという相対主義固有の有効性を発揮できる。氏は最後に、臨床社会学やナラティブ・セラピー、NBM（ナラティブ・ベースド・メディスン）は「役に立つ」「有用」「有効」かと問い、制度的臨床における支配的言説としての近代医学の立場から見たときには、「有効でない」という答えしか出ないと述べる。それらは、そ

れらの内側で自らの有効性を構築しているのである。

以上のような報告（もちろんこれは紙幅および筆者の理解力や関心の方向の制約を受けた概要にすぎない）のあと、各報告者（およびオーガナイザー）間の質疑応答があり、さらにフロアからも発言を受けて討論が行われた。質疑応答の中では、構築主義をどう捉えるにせよ、その有用性は一般化できない局所的なものだという点が複数の報告者によって確認されたこと、佐藤氏が臨床社会学の「二足のわらじを重ね合わせる」という医（学）者と研究者を兼ねる氏にとって「魅力的な提言」は、しかし科学論のパラダイム論からいってもありえないと批判したことは、印象的だった。筆者自身も、構築主義への西阪批判にどう応えるのかという皆川報告中の問いに対して、日本の構築主義者一般はさておき、少なくとも自分はこの系統のEMからの批判に一定の対応（たとえば「クレーム申し立て」を感受概念として位置づけ直すといった）を試みてきたと応答した。

その後のフロアを含めた討論については、紙幅の都合上ごく一部しか紹介できない。最初に、皆川報告で取り上げられたメイナードの著作を訳した樫田美雄氏が、皆川氏の議論にはほぼ同感だが、EMの社会学への重要な貢献であるリフレクシビリティ（相互反映性）概念さえ維持していれば、特定の具体的な実践の文脈（たとえば「医療現場」での医師－患者関係をめぐる方針の対立）の中で、EM的な研究が介入を受けようと、リソースとして活用されようとかまわないのではないかとリプライした。そのあと、足立重和氏から、構築主義的研究はあらかじめ問いが固定されており、「現場の人たちが思っているところから問いを立てる」ことができないため射程がきわめて小さい議論になり、またポジショナリティの自覚が欠落するのではないかという問題提起があり、皆川氏および筆者との間で意

見交換が行われた。さらに、吉田民人氏から、(1)構築主義は領域理論を越えた一般理論化を目指さなければならない、(2)構築には認知的構築、評価的構築、指令的構築（実践的構築）の3モードがあり、前二者のみを対象にするこれまでの認識論的構築主義から、3モードすべてを含んだ存在論的構築主義へと移行する必要がある、(3)構築に対する代替構築の試み（認知的なものだけでなく評価的・指令的な代替構築も）が必要、という3点を骨子に、構築主義を共感的に批判する議論が展開された（詳しくは、吉田 2004 参照）。

3 ラウンドテーブルを ふりかえって

事前からある程度予想できたことだが、何を応用、批判、あるいは有用性だと考えるかという点の認識が、おそらく構築主義に限らず社会学一般において未成熟であるため、(その点をいくらかでも絞り込もうと事前につかの論点(中河 2003/2004)を示しはしたが)、議論の焦点がやや定まらず、一定の隔靴搔痒感があったことは否めない。しかし、抽象的ないい方になるが、複数の共約不可能な言語ゲームが相互に石(異物)を投げこみあいつつ、共約不可能であるからこそコミュニケーションが接続され続けていく、といった応用や批判の可能性についての一つのイメージが、このラウンドテーブルでの討論(とりわけ矢原氏の議論)の中から浮かび上がってきたように見える。筆者自身は、「批判的・応用的であるためにもまずエンピリカルであるべき」と論じてきたが(中河 2004)、そのモットーと上記のイメージの異同の検討はここでは措く。ただ、応用構築主義や批判的構築主義はどのように可能かという検討の口火を切り、具体的な実践例の検討も少しは行えたという点で、果実はさておいてもそれを載せる

皿の用意には、このラウンドテーブルはいくらか貢献したといえるだろう。

文献

- Hacking, I., 1999, *The Social Construction of What?*, Harvard University Press.
- Maynard, D. W., 2003, *Bad News, Good News: Conversational Order in Everyday Talk and Clinical Settings*, The University of Chicago Press. (=2004, 榎田美雄・岡田光弘訳『医療現場の会話分析—悪いニュースをどう伝えるか』勁草書房.)
- ミラー, G., 2003, 岡田光弘訳「理論から応用へ? —構築主義を採用する社会問題の社会学」『文化と社会』4: 57-81.
- 皆川満寿美, 1993, 「『無関与』の協働的達成」『現代社会学理論研究』3: 47-67.
- , 2002, 「相互行為と性現象—エスノメソドロジーからのアプローチ」伊藤勇・徳川直人編『相互行為の社会学』北樹出版, 141-59.
- 中河伸俊, 1999, 『社会学の社会学』世界思想社.
- , 2003/2004, 「ラウンドテーブルのためのイニシャル・ノート」(2003 年秋に討論のベースとして <http://homepage2.nifty.com/tipitina/roundtable2004.htm> で公開したあと、RT 資料として当日配布).
- , 2004, 「構築主義とエンピリカル・リサーチチャリティ」『社会学評論』219: 244-59.
- , 2005, 「『どのように』と『なに』の往還—エンピリカルな構築主義への招待」盛山和夫ほか編『〈社会〉への知 理論知の現在/経験知の現在』勁草書房.
- 西阪 仰, 1996, 「差別の語法—『問題』の相互行為的構成」栗原彬編『講座差別の社会学 I 差別の社会学理論』弘文堂, 61-76.
- 野口裕二, 2001, 「臨床的現実と社会的現実」中河伸俊・北澤毅・土井隆義編『社会学構築主義のスペクトラム』ナカニシヤ出版, 58-75.
- 大村英昭・本村 汎・井上真理子・畑中宗一, 2001, 「座談会・臨床社会学の課題と展望」『現代の社会学病理』11: 19-39.
- 佐藤純一・池田光穂・野村一夫・寺岡伸悟・佐藤哲彦, 2000, 『健康論の誘惑』文化書房博文社.
- Spector, M. and J. I. Kitsuse, 1977, *Constructing Social Problems*, Cummings. (=1990, 村上直之・中河伸俊・鮎川潤・森俊太訳『社会学

- 題の構築』マルジュ社.)
- 上野加代子・野村知二, 2003, 『〈児童虐待〉の構築——捕獲される家族』世界思想社.
- 矢原隆行, 1999, 「システム論的臨床社会学の実践——物語論から社会システム論へ」『現代社会学理論研究』9: 83-96.
- , 2003, 「何かのための社会学と社会学のための何か——臨床社会学の発見」『社会分析』30:, 39-54.
- , 2004, 「チャイルドラインにおけるリフレクティング・プロセスの応用」『アディクションと家族』20(4): 388-96.
- 山田富秋, 2000, 『日常性批判——シュッツ・ガーフィンケル・フーコー』せりか書房.
- 山崎敬一編, 2004, 『実践エスノメソドロジー入門』有斐閣.
- 吉田民人, 2004, 「新科学論と存在論的構築主義——『秩序原理の進化』と『生物的・人間的存在の内部モデル』」『社会学評論』219: 260-80.
- 好井裕明, 1999, 『批判的エスノメソドロジーの語り——差別の日常を読み解く』新曜社.

(大阪府立大学教授)

E-mail: nakagawa@hs.osakafu-u.ac.jp